



Title	『三国遺事』「善徳王知幾三事」第三話と善徳女王陵
Author(s)	金, 善珠; 橋本, 繁
Citation	東アジア諸地域における王室儀礼比較史のための国際的研究基盤の構築 王室儀礼関連翻訳論文／調査報告. 2025, p. 74-87
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100671
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『三国遺事』「善徳王知幾三事」第三話と善徳女王陵¹

金善珠

1. はじめに
2. 善徳女王陵の立地と特徴
3. 善徳女王陵の象徴性
4. 善徳女王陵の造営背景と意義
5. 結び

1. はじめに

『三国遺事』「善徳王知幾三事」条には、新羅最初の女王である善徳女王に関する三つの逸話が紹介されている²。これらの逸話は、善徳女王が優れた予知力をもっていたことを示しており、「女王」という特徴と関連して注目されてきた³。女王であるために即位過程や在位時に困難があったであろうことを前提に、女王即位の正当性を示したり王権を強化するための方便として作られたものと理解されている⁴。

しかし、従来の善徳女王についての関心は、「女王」という視点にばかり偏っていたのではないかとも思われる。そうしたなかで本稿は、「善徳王知幾三事」の第三話に注目してみたい⁵。善徳女王は、新羅王のなかで王陵の所在地が知られている数少ない例に属するが、第三話が善徳女王の死と葬地についての内容を含んでいるという点で興味深いためである。

『三国史記』と『三国遺事』に記された新羅王は五六人であるが、王陵の位置が正確にわかるものは多くない。現在、新羅の王京であった慶州には、王陵と表記される墓が三

¹ 『三国遺事』紀異篇に「善徳王知幾三事」とあるので、王陵を「善徳王陵」と呼ぶのが自然であると考え。しかし、今日、王陵に対する概説書や観光案内版などをみると、ほとんどが「善徳女王陵」と表記している。また、ハングルで表記した場合、下代の王である第三七代宣徳王と混同する可能性がある〔いずれも선덕왕となる〕ため、本稿では王名を「善徳女王」、王陵を「善徳女王陵」と表記する。

² 『三国遺事』巻一・紀異二・善徳王知幾三事。

³ 三つの逸話を対象とした研究は少なくないが、そのうち「善徳王知幾三事」を直接タイトルとして掲げている研究を挙げると次のとおりである。姜英卿「新羅善徳王の「知幾三事」に関する一考察」（『ウォンウ論叢』八、一九九〇年）、姜在哲「「善徳王知幾三事」条説話の研究」（『東洋学』二一、一九九一年）、辛鍾遠「『三国遺事』善徳王知幾三事条の諸問題」（『新羅文化祭学術論文集』一七、一九九六年）、廉仲燮「「善徳王知幾三事」中の第三事考察」（『史学研究』九一、二〇〇八年）、廉仲燮「「善徳王知幾三事」中の第一事考察」（『仏教学報』八一、二〇一七年）、金善珠「善徳王知幾三事の形成時期と背景」（『韓国古代史探求』二五、二〇一七年）。

⁴ 三つの逸話がいずれも善徳女王の死後に作られたものとみて、善徳王のためではなく後代に別の目的で作られたものとする見解もある（金善珠前掲注3論文）。

⁵ 「善徳王知幾三事」第三話のみを扱った研究もある（廉仲燮前掲注3「「善徳王知幾三事」中の第三事考察」）。

六基あるが⁶、ほとんどの墓の被葬者は明らかでない⁷。新羅王陵のうちで被葬者の比定に異見が少ないのは善徳女王・太宗武烈王・文武王・興徳王程度にすぎず⁸、近年、これに元聖王と聖徳王が追加されているという状況である⁹。

ほとんどの新羅王陵の位置が分からないなかで、善徳女王は例外的な事例に当たるといえる点には注意しなければならない。それだけでなく、王陵の位置が確定されている王のなかで、善徳女王だけが統一以前の王であるという点も注目される。『三国史記』の時期区分でいう上代〔始祖赫居世王～第二八代真徳女王〕の王のなかでは、善徳女王のみが王陵の位置を確認できるのである。

もちろん、上代王のうちで善徳女王についてのみ葬地や王陵の位置に関して記録されているわけではない。『三国史記』と『三国遺事』をみると、上古期〔始祖赫居世王～第二二代智証王〕の王のなかで葬地と王陵の所在地が言及されている場合もないわけではなく¹⁰、中古期〔第二三代法興王～第二八代真徳女王〕の六人の王はすべて葬地や王陵の位置についての記録がある。

しかし、今日にいたって大部分の王陵の所在地が不明となっているのは、この間に伝承が途絶えたためである。王陵が造営されてからしばらくの間は、誰の墓であるか伝えられていたであろうが、歳月が流れるとともに特別に記念される場合を除くと伝承が途絶えてしまうほかない。統一以前の王のなかで唯一、善徳女王陵の位置が確定であるということは、それが特別な意味を持っていたためではないかと思われる。

ところが、従来、上代王のなかでなぜ善徳女王に限って王陵の位置の伝承が途絶えなかったのかについて、これといった説明がなされてこなかった。そこで本稿は、善徳女王の死と葬地についての内容を含む「善徳王知幾三事」の第三話を検討するとともに、善徳女王陵造営の背景とその意味を検討してみたい。これらを通じて、善徳女王が女性として王になったという側面だけでなく、新羅史で善徳女王がもつ意味についても考察できるだろう。

⁶ 金龍星「新羅陵苑の意義」（『民族文化論叢』五三、二〇一三年）二頁。

⁷ 新羅王陵の墓制や被葬者を全面的に検討した研究は、次の通りである。姜仁求『古墳研究』（学研文化社、二〇〇〇年）、李根直『新羅王陵研究』（学研文化社、二〇一二年）、金龍星・カンジェヒョン「新羅王陵の新たな比定」（『野外考古学』一五、二〇一二年）。

⁸ 太宗武烈王陵と興徳王陵は、陵の横に建てられた陵碑関連碑文を通して被葬者を確認できる。文武王陵は、水中陵に関わる説話と感恩寺との関係などを通しておよそ甘浦沖の大王岩と推定されている。

⁹ 掛陵を文武王陵や神文王陵に比定する見解もあったが、『三国遺事』と『三国遺事』で紹介された元聖王陵に対する記録と、元聖王陵の造営と関連する内容をもつ崔致遠が著した「崇福寺碑」が掛陵の近くに位置しているため、元聖王陵とする見解が有力である（秦弘燮「慶州甘山寺址・崇福寺址の調査」『考古美術』六（五）、一九六五年、七三一七五頁。李根直前掲注7著書、三九三―四〇四頁）。善徳王陵は伝定康王陵であるとする見解もあるが（姜仁求「新羅王陵の再検討（三）」前掲注7著書所収、四六六―四七七頁）、『三国遺事』王暦の位置関連記事と石物などを通して聖徳王陵の可能性が大きい（李根直前掲注7著書、三八〇―三八二頁。金龍星・カンジェヒョン前掲注7論文、一九六一―二〇一頁）。

¹⁰ 上古期二二名の王のうち『三国史記』と『三国遺事』に葬地や王陵が言及されているのは、赫居世王・南解王・儒理王・脱解王・婆娑王・味鄒王・奈勿王の七人である。

2. 善徳女王陵の立地と特徴

『三国遺事』「善徳王知幾三事」条は、善徳女王が優れた予知力をもっていることを示す三つの話が紹介されている。そのうちの第三話の内容は以下の通りである。

A 三、王無恙時謂群臣曰「朕死於某年某月日。葬我於忉利天中」。群臣罔知其處、奏云「何所」、王曰「狼山南也」。至其月日、王果崩、群臣葬於狼山之陽。後十餘年、文虎大王創四天王寺於王墳之下。佛經云、四天王天之上、有忉利天。乃知大王之靈聖也。(第三は、王が何ら病もない時に群臣に対して「朕は某年某月日に死ぬであろう。我を忉利天に葬れ」と言った。群臣がその場所が分からず、「どこでしょうか」と尋ねると、王は「狼山の南である」と言った。某月日になると、果たして王が崩じたので、群臣は狼山の南に葬った。その後一〇年あまりが経って、文虎大王が四天王寺を王の墓の下に創建した。仏典に、四天王天の上に忉利天がある、とあるので、そこで大王の神霊にして聖なることが分かった。) ¹¹

史料Aは、善徳女王が予言したという二つの内容を紹介している。第一に、善徳女王が生前に自らの死ぬ日を予言し、果たしてその日にこの世を去ったこと、第二に、自らの葬地を生前に指定して忉利天であるといったが、後に文武王代に墓の麓に四天王寺が創建されたことでそのことが証明されたというものである。

忉利天は実際の地名ではなく、仏教の宇宙観に登場する観念的な場所である。そのため、最初に群臣は、善徳女王のいう忉利天がどこであるか分からなかったが、善徳女王が「狼山の南」だと言ったという。はたして、善徳女王は予言したその日にこの世を去り、臣下たちは善徳女王が言ったとおりに「狼山」の南に葬ったという。

善徳女王を狼山に葬ったという内容は、『三国史記』新羅本紀にもみられる。

B (善徳王一六年正月) 八日、王薨。諡曰善徳、葬于狼山。(善徳王一六年(六四七) 正月八日、王がこの世を去った。諡号を善徳として、狼山に葬った。) ¹²。

『三国遺事』紀異篇と『三国史記』新羅本紀が、いずれも善徳女王の葬地を狼山と伝えている。この狼山という地名は、今日の慶州市にも存在する。普門洞と九黄洞、排盤洞の一带にかけての低い山を「狼山」というが、この狼山の頂上部の南側斜面に、史跡一八二号に指定されている「善徳女王陵」と伝わる墓がある¹³。それだけでなく、狼山の麓に善徳女王陵が忉利天であることを証明したという四天王寺址がある。

善徳女王陵は、新羅王陵に言及した文献史料にはほぼ必ず登場する。『三国史記』と『三国遺事』以後で新羅王陵に対する最初の記録である『慶尚道統撰地理誌』〔一四六九年編〕には、新羅王陵のうち九基のみ紹介されているが、そのなかに善徳女王陵も含まれている。同書は善徳女王陵の位置を「慶州府の東、芬南里」と説明している。芬南里は芬皇寺の南側を意味するが、今日の「狼山」の位置と矛盾しない。

¹¹ 『三国遺事』卷一・紀異二・善徳王知幾三事。

¹² 『三国史記』卷五・新羅本紀五・善徳王一六年。

¹³ 東国大慶州キャンパス博物館『慶州狼山遺蹟調査』一九八五年。

その後、編纂された『東国輿地勝覧』〔一四八一年編〕と『新增東国輿地勝覧』〔一五三〇年編〕には、九基以外に武烈王陵と文武王陵である大王岩が追加されて一一基の新羅王陵が紹介されており、善徳女王陵の位置は「狼山南側の丘」とされている¹⁴。朝鮮後期に善徳女王陵に言及した文献も、ほとんどが王陵の位置を「狼山」としている。『三国史記』と『三国遺事』で善徳女王陵が位置するとした「狼山」という地名が、今日まで続いてきていることが分かる。そうであるとする、今日の慶州市にある「狼山」は、善徳女王を葬ったというまさにその「狼山」であると理解できる。狼山という地名と四天王寺址との位置関係を考慮すると、狼山頂上部に位置する史跡一八二号の善徳女王陵をそのまま認めて問題ないだろう。

また、善徳女王陵は、新羅王陵に言及した高麗時代と朝鮮時代の文献資料に必ず登場していること以外に、立地面からも注目すべき特徴をもっている。

第一に、善徳女王陵が狼山に位置しているという点である。このことが特別であるというのは、法興王以後の中古期の王は慶州市の西側に位置する西岳を葬地としているためである。『三国史記』新羅本紀は、法興王と真興王の葬地をいずれも「哀公寺の北峯」としている¹⁵。次の真智王は「永敬寺の北」に葬ったとしているが¹⁶、『三国遺事』王暦には「陵は哀公寺の北に在り」としていて¹⁷、真智王も法興王、真興王と似た陵域に葬地が造成されたことが分かる。

哀公寺は、『三国遺事』紀異篇で太宗武烈王の葬地として説明されている¹⁸。それだけでなく、『三国史記』は太宗武烈王陵が「永敬寺の北」にあるとしており、太宗武烈王陵が法興王陵、真興王陵、真智王と同じ地域にあることが分かる。

ところで、太宗武烈王陵は、王陵の位置が確実視されている新羅王陵の一つである。慶州市西岳洞古墳群の入り口に「太宗武烈王陵之碑」という題額が書かれた螭首が亀趺とともに現存しており、亀趺近くの右側にある墓が太宗武烈王陵とされている。

この太宗武烈王陵の後方に超大型古墳四基があり、西岳洞古墳群と称されている。具体的な被葬者の比定には様々な意見があるものの、おおよそこの西岳洞古墳群に太宗武烈王と似た位置と説明されている法興王、真興王、真智王の陵があるものと考えられている¹⁹。中古期の王は、西岳を陵域としてきたのである。

ところが、善徳女王陵は、中古期王室の陵域である西岳ではなく、狼山という別の地域を葬地としたのである。中古期に西岳を離れて他の地域に王陵を造営したのは、善徳女王が初めてではなかった。『三国史記』には真平王の葬地を「漢只」としている²⁰。漢只が今日のどこであるかは確実でないが、少なくとも中古期の陵域である西岳ではないことが分かる。

¹⁴ 新羅王陵に関する文献記録は、李根直による整理が参考となる（李根直前掲注7著書、八二一八九頁）。

¹⁵ 『三国史記』卷四・新羅本紀四・法興王二七年、真興王三七年。

¹⁶ 『三国史記』卷五・新羅本紀五・真智王四年。

¹⁷ 『三国遺事』卷一・王暦。

¹⁸ 『三国遺事』卷一・紀異一・太宗春秋公。

¹⁹ 姜仁求「新羅王陵の再検討（一）」（『東方学誌』四一、一九八四年）五九一八八頁、李根直「慶州西岳洞新羅中古期王陵研究」（『三国遺事紀異篇研究』韓国学中央研究院、二〇〇六年）二四七一三〇六頁。

²⁰ 『三国史記』卷四・新羅本紀四・真平王五四年。

第二に、善徳女王陵が狼山の頂上部に位置しているという点である。新羅で麻立干期に流行した積石木槨墳は、平地に位置している。そして、中古期の法興王からは立地が山へと変化した。王陵の位置を記録した文献に「峰」という表現が現れるだけでなく、実際に中古期王室の陵域として知られる西岳洞古墳群は西岳の稜線に位置しており、中古期になって王陵の立地が平地から山地へと変化したことが分かる。

善徳女王陵も狼山に位置しており、山地に立地するという点ではそれまでの中古期の王と同様である。しかしながら、西岳洞古墳群は西岳の稜線に位置しているのに対して、善徳女王陵は狼山の頂上部に位置している。真平王陵については比定が確実でないが、伝真平王陵や真平王陵の可能性があるとされる伝憲徳王陵は平地にある。善徳女王陵だけが、山地の頂上部に位置しているのである。

第三に、善徳女王陵が単独の陵苑であるという点である。積石木槨墳という墓制を使用した麻立干期〔麻立干は新羅上代の王号の一つ。第一七代奈勿王から第二二代智証王まで使用〕には、王陵は王族や貴族と分けられずに一緒に集団群集墓として造られている。その後、法興王以後の中古期になると、王陵は分離して西岳に陵域が造営された。

しかし、これら中古期王も個別の陵域をもってはいなかった。西岳洞古墳群にみられるように、王をはじめ王室の墓域が分離されているだけで、王陵は陵域を同じくしている。ところが、善徳女王陵は、一基だけが単独で陵域に造営されている。善徳女王陵が中古期王室の陵域である西岳から離れて狼山地域に、それも山の麓や稜線ではなく頂上に近い場所にあり、しかも単独の陵苑であるということは大きな特徴である。こうした立地の特徴は、善徳女王陵が特定の意図をもって計画的に作られた可能性を示している。

3. 善徳女王陵の象徴性

「善徳王知幾三事」第三話によると、善徳女王は生前に自らが死ぬ日を予言するとともに葬地を「切利天」に指定し、その言葉通りになったという。自らの死ぬ日を予言したというのは、事実とは考え難い。そして、王を狼山に葬った後に四天王寺が創られると、その寺の上に位置する善徳女王陵が仏教教理的に切利天になるため、四天王寺の創建以後のある時点に作られた話とも理解される²¹。統一期に形成された後に、善徳女王代のこととして遡らせたものとされている²²。

もちろん、第三話で善徳女王の優れた予知力が明らかになったのはこの世を去った後のことであるため、生前に創られうる話ではない。だからといって、第三話の内容が善徳女王とは全く無関係に後代に作られたと理解しなければならないのだろうか。

善徳女王が死ぬ日を予言したということについては、正確な日付までではなくても死を予感して葬地について話しておいたことはありうるのではないか。すなわち、善徳女王陵の葬地を「狼山」とするのは、女王の生前に計画されていた可能性がある。

計画的に善徳女王陵を狼山に造成した可能性と関連して、真平王陵に注目したい。中古期の王で西岳から離れて王陵を造営したのは、善徳女王が初めてではなかった。善徳女王の父である真平王も、西岳ではない地を葬地とした。『三国史記』は真平王の葬地を「漢只」とするが、正確な現在地は不明である。

²¹ 辛鍾遠前掲注 3 論文、五五頁。

²² 李根直前掲注 7 著書、二四七頁。

現在、慶州市普門洞には、真平王陵と伝わる墓があるものの確かではない。真平王陵ではなく神文王陵と推定して、北川近くにある伝憲徳王陵を真平王陵に比定する見解もある²³。

伝真平王陵について神文王陵ともする議論がある理由は、二つの王陵の位置についての説明が類似しているためである。真平王の葬地として記録された漢只は、新羅六部の一つである漢岐部と関連するものとされるが、『三国史記』列伝に孝女知恩が住んでいる場所として漢岐部が出てくる²⁴。ところで、同じ話が載っている『三国遺事』には、この地域を芬皇寺の東里（「芬皇寺之東里」）と表現している²⁵。真平王の葬地である漢只が、芬皇寺の東側にあった可能性を示している。

現在、真平王陵とされている墓の位置をみると、「芬皇寺の東」という説明から離れていない。また、『三国史記』は神文王の葬地を「狼山の東側」とするが²⁶、狼山と芬皇寺は南北線上にあり芬皇寺の東は狼山の東でもある。狼山の東側に位置している伝真平王陵は、文献記録からすると真平王陵とも神文王陵ともみなしうるのである。

そのため、墓制的な側面からみて伝真平王陵が統一以後の形式であると判断した場合は神文王陵と、統一以前の形式であると解釈した場合は真平王陵と推定することになる。本稿は王陵被葬者の比定が目的ではないため、伝真平王陵が誰の墓であるか穿鑿することはしない。ただ、善徳女王の父である真平王も中古期王室の陵域である西岳から離れた場所を葬地としたことと、その位置が狼山近くであるという点を指摘したい。

中古期王の陵域である西岳を離れた最初の事例である真平王の葬地が、狼山と関係している点は吟味する必要がある。善徳女王陵を造成した狼山は、善徳女王代以前にすでに注目されていたのである。そうであれば、善徳女王がこの世を去る前に、葬地を狼山とすることが計画されていた可能性がある。そうすると、第三話の説明通り、善徳女王が生前に狼山を葬地とすることについて臣下と話したことも十分にありうるのではないか。

ところで、第三話をみると、善徳女王が葬地を狼山とすることを言う際に、最初に「忉利天」と表現していることがみられる。狼山を葬地とするのが計画的であったとすると、まさにこの忉利天を意図したものだのだろうか。第三話では臣下が「忉利天」がどこのことであるのか分からず、文武王代に善徳女王陵の下に四天王寺が建立されることで忉利天であることが分かったとしていて、善徳女王当時には「忉利天」とあるという認識がなかったと説明している。

忉利天は、仏教的世界観では宇宙の軸である須弥山の頂上に位置していると考えられる場所である。世界の中心である須弥山の頂上に忉利天があり、須弥山の中腹に四天王が住んで仏法を守護しているという²⁷。そのため、第三話では、狼山の中腹に「四天王寺」が建てられることによって教理的に須弥山となり、その頂上部にある善徳女王陵が忉利天になったと説明したのである。

ところで、こうした説明は、文武王代になぜ四天王寺を狼山の麓に造成したのかとい

²³ 姜仁求前掲注7 著書、四六七―四六八頁。金龍星・カンジェヒョン前掲注7 論文、二〇―一頁。

²⁴ 『三国史記』卷四八・列伝八・孝女知恩。

²⁵ 『三国遺事』卷五・孝善九・貧女養母。

²⁶ 『三国史記』卷八・新羅本紀八・神文王一二年。

²⁷ 張忠植「新羅狼山遺跡の諸問題」（『新羅文化祭學術論文集』一七、一九九六年）一九頁、廉仲燮前掲注7「善徳王知幾三事」中の第三事考察」六三頁。

う疑問を生じさせる。四天王寺は、唐の侵入という切迫した状況で建立された²⁸。文武王代の新羅王京には多くの寺院があったため、単純な信仰次元の祈祷を目的としたものであれば新たな寺院を造営する必要はなかったはずである。それどころか建物を建てる時間的余裕すらなく、彩色した絹布によって臨時で仮設したほどであった。

切迫した状況で仮設であろうとも作らなければならなかった寺が狼山に位置するというのは、偶然とは考え難い。それは、四天王寺の建立当時の狼山が、仏法の力を借りて唐の勢力を撃退するという目的をもった寺院に相応しい神聖な場所と認識されたためではなかろうか。

これと関連して、善徳女王陵の立地に注目したい。現在、善徳女王陵は、狼山頂上部の南側に単独で位置している。王陵が山にあるという場合でも、一般的には山の麓や稜線に位置しており、中古期の陵域である西岳古墳群をみても仙桃山東側の稜線上に位置している。

ところが善徳女王陵は、狼山の頂上部に、それも単独で位置している。山の頂上部に陵墓を作るというのは一般的ではない²⁹。善徳女王陵が狼山頂上部に位置しているということが特別であるとする、特定の目的をもって意図的に山の頂上部に王陵を作ったと理解できるだろう。

山の頂上部に王陵を造成した意図と関連して、善徳女王が表現したという「忉利天」が注目される。忉利天は、仏教的世界観で宇宙の中心軸である須弥山の頂上部に位置している。葬地を「忉利天」にしようとする、山の頂上部になくはないのである。善徳女王陵が狼山頂上部にあるということは、初めから「忉利天」を意図した計画的なものであったことを意味する。

そうであれば、「忉利天」を意図して善徳女王陵を狼山頂上部に造成した理由はなんなのだろうか。善徳女王陵が位置している狼山頂上部が忉利天であるとする、忉利天のある狼山は須弥山となる。これは、狼山を世界の軸として信仰する仏教の人生観ないし世界観を表す³⁰。さらには、新羅を中心とする仏教的世界観を表したものである。

須弥山認識と関連して、善徳女王在位時に狼山を須弥山と認識しようという動きがあったともされ³¹、具体的に善徳女王四年（六三五）とする見解もある³²。狼山を具体的に須弥山と認識したかどうかは断言しがたいが、少なくとも狼山を中心軸として理解しようという認識が善徳女王代に存在したことは確認できる。

新羅では統一以前に新羅王京を範囲とした五岳観念が形成されていたとされる³³。ところで、真平王代になされた仏事で「五岳神君」という表現がみられることから、少なくとも真平王代までには五岳観念が形成されていたと考えられる³⁴。王京を範囲とした五岳観

²⁸ 『三国遺事』巻二・紀異二・文虎王法敏。

²⁹ 新羅王陵として伝わっている古墳のうち、山の頂上部に立地している墓は善徳女王陵と伝閔哀王陵のみである（李根直前掲注7著書、四三七頁）。

³⁰ 張忠植前掲注27論文、九頁。

³¹ 朱甫暉「新羅狼山の歴史性」（『新羅文化』四四、二〇一四年）一一頁。

³² 明朝の新羅帰国説の一つに善徳女王四年説があるということを根拠に、この時期に狼山＝須弥山説が成立したものとする（辛鐘遠前掲注2論文、五六頁）。

³³ 李基白「新羅五岳の成立とその意義」（『新羅政治社会史研究』一潮閣、一九七六年）二〇七頁。

³⁴ 『三国遺事』巻七・感通七・仙桃聖母随喜仏事。

念では、狼山が中岳と認識されたとみられる³⁵。狼山が中岳であるなら、五岳観念で狼山を中心軸ととらえたことが分かる³⁶。

狼山についてのこうした認識が、仏教式世界観における宇宙の中心軸である須弥山とされる背景になった可能性がある。そのため、狼山が須弥山であるという意識が浮上していくなかで、善徳女王が狼山に葬られたとも理解される。

狼山を須弥山とする認識と関連しては、皇福寺が注目されることもある。皇福寺が善徳女王代に建立されたものと理解し、皇福寺建立を契機に須弥山と認識するだけの基盤が整い、それよりもさらに高い場所に善徳女王陵を造営することで具体化しようとしたというのである³⁷。

しかし、皇福寺の建立年代が善徳女王代であるのかは確実でない³⁸。狼山に対する認識と関連しては、むしろ真平王代に注目する必要があるのではないか。真平王陵は中古期の王陵域である西岳を離れた最初の事例であるが、その位置が狼山圏域である。真平王陵が西岳を離れたことも、狼山を意識したものと理解される。

一方、切利天を葬地とすることと関連して、安弘が注目される。『海東高僧伝』には安弘が書いたという識書が紹介されているが、そのなかに切利天葬地と関連する内容がある。

C 和尚返國以後、作識書一卷、字印離合爲之者罕測、宗途幽隱索理者難究。如云「鵠鶴鳥（碑文隱晦未詳）散」、又云「第一女主葬切利天」及「千里戰軍之敗」「四天王寺之成」「王子還鄉之歳」「大君盛明之年」。皆懸言遙記的、如目覩了無差脱（和尚は本国に戻った後、識書一卷を著した。文字が離れたり合わさったりしていて文字の分かるものでも理解するものは少なく、その意味が隠密で理知を求めようとしても究めがたかった。すなわち、「フクロウが散じた」であるとか「第一女主を切利天に葬る」「千里で戦った軍が敗れる」「四天王寺が成る」「王子が還郷した歳」「大君が盛明なる年」などである。これらは思いもつかないことを予言したものであるが、法師は見てきたかのように少しも外れなかった）。³⁹

『海東高僧伝』は識書の著者を安含とするが、安含は『東都成立記』の著者である安弘と同一人物であり、安弘（安含）が書いたという識書が『東都成立記』であるとされる⁴⁰。史料Cには「切利天に葬る」という文がみられ、切利天に葬ったという女主が善徳女王を指すことは明白である。

³⁵ 朱甫瞰前掲注 31 論文、一七頁。

³⁶ 五方観念に注目して、善徳女王代に慈蔵によって仏教的五方観念が王室に受容されるとともに、狼山に対する神聖化作業がなされたものとする見解もある（金炳坤「新羅の王京五岳と（小）金剛山」『新羅文化』四三、二〇一四年、三八二—三八三頁）。

³⁷ 朱甫瞰前掲注 31 論文、一一—一三頁。

³⁸ 義湘が二九歳（六五四四年）に皇福寺で出家したという『三国遺事』の記録から、すでに真徳女王代には皇福寺があったことが分かるが（金福順「義湘と皇福寺」『新羅文化祭学術論文集』一七、一九九六年、一四七頁）、それ以外には創建時点を推定できるだけの手がかりがなく、善徳女王代に創建したものとは断定しがたい。

³⁹ 『海東高僧伝』卷二・流通一之二・釈安含。

⁴⁰ 辛鐘遠「安弘と新羅仏国土説」（『新羅初期仏教史研究』民族社、一九九二年）二三四頁。

さらに、翰林である薛某が王命によって作ったという碑銘も紹介されており、似たような内容が載せられている。

D 后葬忉利、建天王寺。怪鳥夜鳴、兵衆旦殪。王子渡關、入朝聖顏、五年限外、三十而還。浮沈輪轉、彼我奚免（后を忉利天に葬り、四天王寺を建てた。怪鳥が夜に鳴き、兵はみな朝に死んだ。王子は関門を越え、中国に入朝して皇帝にまみえ、五年間外地で過ごして三〇歳で帰ってきた。浮き沈みや輪転を、誰が逃れられようか）⁴¹。

狼山を須弥山とする認識がいつごろから形成されていたかは検討の余地があるが、忉利天への埋葬に関する内容が安弘の識言とされていることから、善徳女王陵の造成には安弘の影響があったものと理解される。

安弘は隋に留学して真平王二七年（六〇五）に帰国して活動した後、善徳女王九年（六四〇）に亡くなった⁴²。善徳女王陵の造成に安弘の影響があったとすると、忉利天を意味する狼山頂上部に善徳女王陵を造営するという構想は、善徳女王九年以前にあったものと理解される。

安弘は、新羅仏国土を主張した人物としてよく知られている⁴³。頂上部に位置する善徳女王陵が忉利天であるということは、狼山が宇宙の中心軸である須弥山ということである。さらに、宇宙の中心軸である須弥山がある新羅は仏国土となる。狼山が忉利天であるという認識も、新羅仏国土説の一環として作られたものではないだろうか。

狼山を須弥山とする構想は、安弘の活動時期からすると真平王代後半期には提示されていたものとみられる。真平王陵が狼山を意識して中古期の王が使用した西岳を離れたことから、真平王代に狼山に対する認識の変化があったことが分かる。

しかし、真平王陵は直接的に狼山に位置していたわけではない。それは、次の善徳女王に備えたものではなかったろうか。忉利天となる狼山の頂上部には善徳女王陵が位置するということが構想されていた可能性がある。似たような構図は、新羅王室による釈迦族の再現にもみられる。真平王夫妻の名が釈迦の両親であり、真平王の弟の名が釈迦の叔父であるということはよく知られている⁴⁴。

新羅王室で釈迦族を再現したこれらの名前からも、主人公は真平王の次の代になる。釈迦族再現でも次の代を中心とした構想であったように、葬地造成でも次の代である善徳女王を中心として、真平王陵は狼山に直接位置しなかったものと理解される。

善徳女王陵が狼山頂上部に位置したのは「忉利天」を意図したものであり、真平王陵と関連する全体的な構想の中で計画されたと理解できる。善徳女王陵が忉利天にあるということは、狼山が須弥山であり新羅が仏国土であるという認識を確かに表したものである。狼山を須弥山とする新羅仏国土説は真平王代に提示され、善徳女王陵が狼山に位置す

⁴¹ 『海東高僧伝』巻二・流通一之二・釈安含。

⁴² 安弘の帰国時期については、真平王二七年（六〇五）説と四七年（六二五）説があるが、安弘に隋の仏教の影響がみられることから隋時期に該当する真平王二七年に帰国したものと理解される（辛鐘遠前掲注 40 著書、二三五頁）。

⁴³ 辛鐘遠前掲注 40 著書、二四三―二四八頁。

⁴⁴ 金哲埭「新羅上代社会の Dual Organization」（『韓国古代社会研究』ソウル大出版部、一九九〇年）一四八頁。

ることによって狼山が須弥山であるという認識が新羅で確固たるものとして定着したのではないだろうか。

4. 善徳女王陵の造営背景と意義

善徳女王陵を狼山頂上部に造営したことは、狼山を須弥山とする狼山中心の仏教的宇宙観を表したものである。それだけでなく、善徳女王陵を狼山頂上部に造営することによって、善徳女王は須弥山の頂上部で忉利天を主宰する忉利天主となるのである。忉利天を死後の居所としたということは、善徳女王の死後の安息の地が忉利天であり、善徳女王が死後、忉利天主になるということを意味した。

忉利天主の主宰者である忉利天主は、帝釈であった。仏教の宇宙観によると、宇宙の中心軸である須弥山の頂上には三三天が住んでおり、その中央に忉利天主である帝釈天がいるという。帝釈天は、四大洲の人間をあまねく見わたす任務をもっている四天王を率いて人間世界を見下ろしているという⁴⁵。

善徳女王陵が忉利天にあるということは、狼山を須弥山とする新羅仏国土観を表すだけでなく、善徳女王が忉利天主の主宰者として仏法と仏国土を守る帝釈であることを意味した。善徳女王が帝釈天女の化身であることを意図したものである⁴⁶。

善徳女王が死後「帝釈」たることが意図されたのは、「善徳」という諡号からもみられる。善徳は忉利天主を主宰する帝釈の別名である⁴⁷。帝釈は忉利天主のなかの善法堂に住みながら善悪を主することで善徳に象徴されるという⁴⁸。中古期の王の諡号は「真」字を含むが、仏教を公認して仏法を興した法興王以外には、善徳女王のみが例外であるという点が注目される。

「善徳」という諡号も、特別な意図が込められたものであることがわかる⁴⁹。善徳という諡号が帝釈の別名であるという点も、善徳女王が死後、忉利天主の帝釈を標榜したことを意味する。忉利天主である狼山頂上部に善徳女王陵を造営したことは、善徳女王が帝釈であるという観念の延長線上にあった。

帝釈はインド固有神であるが、釈迦に帰依した後は仏教最高の護法神となり、仏が説法する際には常に眷属を率いて護衛したという⁵⁰。善徳女王陵を忉利天主である狼山頂上部に作ったのは帝釈を意図したものであり、善徳女王が死後、帝釈となったことは、仏国土である新羅を守護することを意味した。

善徳女王陵の下に建立された四天王寺は、忉利天主の主宰者である帝釈に対する認識を示している。唐の侵攻という緊迫した状況で狼山に創建された寺院の名前が「四天王」であった。四天王は帝釈と密接な関係をもっている。須弥山頂上の忉利天主に居る帝釈は、四天王を率いて仏法と仏国を守護する存在である。

⁴⁵ クォンジュンソ「仏教經典からみる四天王」(『文献と解釈』六五、二〇一三年)一一三—一一四頁。

⁴⁶ 姜在哲前掲注2論文、八六頁。

⁴⁷ 金哲竣前掲注44論文、一四八頁。

⁴⁸ 金哲竣前掲注44論文、一四八頁。金杜珍「新羅真平王代の釈迦信仰」(『韓国学論叢』一〇、一九八三年)二二頁。

⁴⁹ 金哲竣前掲注44論文、一四八頁。

⁵⁰ 安智源「新羅真平王代帝釈信仰と王権」(『歴史教育』六三、一九九七年)六七—六八頁。

四天王は忉利天という観念が前提されているという点から、唐の侵入という緊迫した状況で狼山に四天王寺を建立したのは帝釈に対する期待があったためである。軍事的な力では絶対的に劣勢である状況で、唐を撃退する当為性と退けることができるという信念が必要であった。それが帝釈であった。

そうであるとする、忉利天を意図して狼山頂上部に善徳女王陵を造営するとともに善徳女王を死後、帝釈とした理由はなんなのだろうか。帝釈は仏法と仏国を守護する護国神であるという点から、危機意識があったことが分かる。危機意識を克服するための理論的基盤が、新羅仏国土説である。仏国土説は、仏国土であるために外敵の侵略から保護しなければならないという護国思想を合理化するものである⁵¹。そのため、新羅仏国土説の背景として新羅の危機意識が指摘されることもある。

新羅の危機意識と関連して、主に善徳女王代が注目される。善徳女王が女王であるために対内外的な不安があったと理解されるのである。特に、大耶城が陥落して四〇城あまりを百済に奪われた善徳女王十一年（六四二）を契機に、新羅は内外で危機に逢着していたと理解されている。

そのため安弘が、女王であるという欠点を補完し、暗鬱な新羅に希望を呼び起こすために新羅仏国土説を提起したというのである⁵²。ところで、安弘は善徳女王九年（六四〇）に亡くなっている。そのため、最初に安弘によって新羅仏国土説が提起されたのはそれ以前になる。

新羅仏国土説が新羅の危機意識を背景に提起されたものであるとすると、安弘の活動時期と関連して、むしろ真平王代が注目される。新羅は真興王の活躍で領土が拡大したが、真平王代にそれに伴う代価として高句麗と百済両国から攻撃を受けねばならなかった。真平王代は戦争が日常化した時期であり、僧侶である円光は隋に援軍を要請する「乞師表」をつくらねばならないほどだった⁵³。

乞師表を書いた円光は、世俗五戒を提示した人物として知られているが⁵⁴、その一つとして「臨戦無退（戦いに臨んで退かない）」がある。ところで、「臨戦無退」は『阿含経』を根拠としたものであり、仏法と仏を守護する帝釈とその眷属の役割を、仏国土たる新羅で積極的に実践することを青少年に対して督励したものとみる見解もある⁵⁵。

『阿含経』に対する理解が、帝釈信仰の基盤造成に決定的な役割を果たしたとみられる。円光が四種の『阿含経』を遍く渉猟した点から、円光が活動した真平王代には『阿含経』が新羅にも流布していたと考えられる⁵⁶。『阿含経』が帝釈信仰の土台となることから、危機意識を基盤とした帝釈信仰が真平王代に流布したことが分かる。

このほかにも、真平王代における帝釈信仰を確認できる。真平王が「内帝釈宮」に赴いた際に石の階段が割れたという。「内」は宮内を意味し、宮内で帝釈を祀った寺院とみられる。それだけでなく、真平王は即位初に上帝が送った使者から玉帯を受け取ったという⁵⁷。仏教の帝釈は伝統信仰の天帝観念と通じ、真平王に玉帯を下した上帝も帝釈と理解

⁵¹ 金相鉉「新羅三宝の仏教思想的意味」（『新羅の思想と文化』一志社、一九九九年）六八頁。

⁵² 辛鍾遠前掲注 40 著書、二三九頁。

⁵³ 『三国史記』卷四・新羅本紀四・真平王三〇年。

⁵⁴ 『三国史記』卷四五・列伝五・貴山。

⁵⁵ 安智源前掲注 50 論文、六八一七三頁。

⁵⁶ 安智源前掲注 50 論文、六九頁。

⁵⁷ 『三国遺事』卷一・紀異一・天賜玉帯。

できる。

帝釈が居る欲界第二忉利天は、世界の主軸となる須弥山の頂上に位置し、四方八天と中央一天を合わせた三三天で守られている。帝釈はそうした三三天の中央、善見城にいて三三天を率いる「諸天の君」として伝統的巫俗信仰の天帝と意味が通じるという⁵⁸。仏法と仏国を守る護国神である帝釈に対する信仰が拡散していたということは、真平王代に国家的危機意識が高まっていたことを意味する。

このような危機意識のなかで安弘は、新羅仏国土説を提起した。安弘は隋留学時に文帝の仏教政策と仏国土思想を見聞し、帰国してこれを新羅に援用したものとされている⁵⁹。新羅仏国土説は、新羅人が国家に対する自負心をもつことに寄与した。護法すなわち護国であるとして、仏国土であるのだから外敵の侵略から国家を護らなければならないと護国信仰を合理化した⁶⁰。

安弘が提示した新羅仏国土説構想には、皇龍寺九層塔の建立もあった。皇龍寺九層塔も安弘の死後に建立されたものではあるが、建立目的であった新羅仏国土観念によって善徳女王一一年以前に必要であったものである。

皇龍寺九層塔が建立されたのは、安弘がこの世を去った後、善徳女王一一年の大耶城陥落後のことだった。この時点を契機として新羅の対外政策に変化があったためである⁶¹。すなわち、消耗戦を繰り広げていた新羅は、この後、百済併合を計画するようになった。

善徳女王の統一への意志を結果論的なものとする意見もある⁶²。新羅が国家の存続を目的に争う過程で得られたとみることもある。しかし、新羅の状況から、外敵を退けることができ、それは退けねばならないという論理と信念の存在まで否定はできないだろう⁶³。

新羅が周辺の侵略を退けて中心となるという信念と自信をもつに際しては、新羅仏国土説が重要な役割を果たした。特に、皇龍寺九層塔は、新羅が天下を制覇するほかない、統合しなければならないという当為性を示す象徴として理解されている。皇龍寺九層塔の建立を契機に団結した国民精神と力は、国家を危機から救いさらに三国統一につながったとみられる⁶⁴。

ところで、仏国土観念で皇龍寺九層塔に劣らず重要な象徴性をもったのが、善徳女王陵であった。忉利天に善徳女王陵があるということは、狼山が宇宙の中心である須弥山になり、須弥山がある新羅は仏国土であった。仏国土である新羅は、周辺の侵略を退けて保護しなければならない当為性をもつのである。

それだけでなく、善徳女王は仏国である新羅を保護する帝釈であった。文武王代に四天王寺を狼山に建立したのは、忉利天に居て仏法と仏国を保護する帝釈を頼るものであっ

⁵⁸ 安智源前掲注 50 論文、七三頁。

⁵⁹ 辛鐘遠前掲注 40 著書、二三五頁。

⁶⁰ 金相鉉前掲 51 著書、六四頁。

⁶¹ 善徳女王後半期は国家的危機意識を感じるほどの状況ではなかったという見解もある。善徳王一一年（六四二）に大耶城陥落とともに四〇城余りが陥落したが、善徳王一三年（六四四）には新羅が再び百済を相手に勝利しており、一二年（六四三）には買利浦城の戦いで勝利している（朴承範「七世紀前半期新羅危機意識の実像と皇龍寺九層木塔」『新羅史学報』三〇、二〇一四年、三〇一頁）。

⁶² 金相鉉前掲注 51 著書、六二一六三頁。辛鐘遠前掲注 40 著書、一八五頁。

⁶³ 辛鐘遠前掲注 40 著書、二四七頁。

⁶⁴ 金相鉉前掲注 51 著書、六七頁。

た。結果的に新羅は、百済と高句麗を順に併合して唐の勢力を退けた。新羅人は、唐を追い出すことができたのは四天王寺建立のおかげと考えた。

統一後には皇龍寺に代わって僧政機構としての様々な機能を担うほど、四天王寺の地位は高かった⁶⁵。四天王寺は、国家の官府である成典が設置された成典寺院のうちでもっとも格が高かったと考えられる。狼山には四天王寺以外にも仏教遺跡が位置しているが、六七九年の四天王寺建立を起点として狼山が新羅社会で新たに注目されるようになったと理解される⁶⁶。

ところで狼山の象徴性は、善徳女王陵にあった。四天王は帝釈と密接な関連がある。四天王寺を狼山に建立したのも、狼山頂上部に帝釈が住むと考えられたためである。四天王寺は忉利天という観念が前提とされていることから、四天王寺が重視されればされるほど、狼山頂上部で帝釈として四天王を率いて仏国土新羅を保護する善徳女王を想起しないわけにはいかなかっただろう。

三国統一で戦争に苦しんだ新羅人は、安定を取り戻した。新羅が統一できたのは仏の力、新羅は仏国土だという認識が大きく作用した。新羅が仏国土説を基盤に「三韓を統合して君臣が安楽」になりえたというのは、皇龍寺九層塔のためではなかった。

善徳女王陵が忉利天である狼山頂上部に位置することで、狼山は須弥山となり新羅は仏国土そのものとなった。それだけでなく、善徳女王は須弥山頂上で忉利天を主宰するとともに四天王を率いて仏国土を保護する護国神である帝釈であった。善徳女王陵は、仏国土とそれを保護する帝釈の象徴であった。

善徳女王陵がもつこうした象徴性は、新羅が周辺の侵略を退けて統一を成し遂げる重要な基盤になった。善徳女王陵は新羅が仏国土として周辺の侵略を退けて保護しなければならない当為性を提供しただけでなく、善徳女王が帝釈として周辺の侵略から新羅を保護してくれるものと信じられた。

三国を統一して唐の勢力を追い出すとともに善徳女王陵がもった象徴性は、統一以後につながったものとみられる。統一以前の新羅王のうちで唯一、善徳女王だけが王陵の位置についての伝承が途絶えなかったのは、統一後にも善徳女王陵が仏国土と護国の象徴的な意味をもつと同時に新羅人によって持続的に記念されたためではないだろうか。

5. 結び

本稿は、「善徳王知幾三事」の第三話に注目した。第三話は善徳女王の死と葬地についての内容であるが、善徳女王陵が統一以前の王のなかで唯一、王陵の位置についての異論がない点と関連して関心をもった。

善徳女王陵は統一以前の王のなかで唯一、王陵の位置が確実だけでなく、立地面でも特徴的である。その特徴とは、第一に法興王以後の中古期新羅王の陵域である西岳ではなく狼山に位置していること、第二に一般的な陵墓と異なり狼山の頂上部に位置していること、第三に善徳女王陵だけが単独で陵苑をもっていること、である。

こうした立地的特徴を通じて、第三話で説明されるように、善徳女王陵は女王が世を去る前に計画され、特定の意図をもっていたものとみられる。善徳女王は自らの葬地を

⁶⁵ 蔡尚植「新羅統一期の成典寺院の構造と機能」(『歴史と境界』八、一九八四年)一一二頁。

⁶⁶ 張忠植前掲注 27 論文、一八頁。

「狼山」と指定するとともに「忉利天」と表現した点から、忉利天を意図したものと理解した。

狼山頂上部にある善徳女王陵が忉利天であるということは、狼山は仏教的世界観で中心軸と認識される須弥山であり、新羅が仏国土であることを象徴するものであった。狼山を中心軸とする認識は、真平王代にも存在した。真平王代に新羅王京を主にした五岳観念が整備されたものとみられ、その中岳が狼山であった。狼山を中心軸とする観念は、仏教的世界観が流布するとともに宇宙の中心軸である須弥山に変化したものと考えられる。

新羅が危機意識をもつとともに、護国の理論的基盤になったのは仏国土説であった。仏国土説は、新羅が周辺の侵略を退けて保護しなければならない当為性をもつものである。新羅が三国を統一して唐の勢力を追い出す原動力となった新羅仏国土説において、象徴的な意味をもったのが善徳女王陵であった。

善徳女王陵が忉利天である狼山頂上部に位置することで、狼山は須弥山となり新羅は仏国土それ自体になった。それだけでなく、善徳女王は須弥山頂上で忉利天を主宰しながら四天王を率いて仏国土を守護する護国神である帝釈を意味した。

善徳女王陵がもつこうした象徴性は、新羅が周辺の侵略を退けて統一を果たす重要な基盤になった。善徳女王陵は、新羅が仏国土として周辺の侵略を退けて保護しなければならないという当為性を提供するだけでなく、善徳女王は帝釈として周辺の侵略から新羅を保護すると信じられるようになった。

善徳女王陵は、仏国土と護国の象徴的な意味で統一以後にも継続して記念された。今日、統一以前の新羅王のなかで善徳女王陵のみが唯一王陵の位置が確認できるのは、統一以後にも善徳女王陵が象徴性をもって絶えることなく記念されたためであるといえる。

原載：『新羅文化祭学術発表論文集』40、2019年。

翻訳：橋本繁